2023
3月号
No.20

拓く通信

わたしたちの暮らしをわたしたちの手にとりもどす❷

人生100年時代、コロナ禍3年を乗り越えて―。パターナリズム（介入）からの脱却

理事長メッセージ⑩

社会福祉法人拓く　理事長　**馬場　篤子**

高齢者人口が3割から4割の時代に突入です。災害多発の不安も加わり先行きが不透明。しかし、コロナ禍3年を経て、人々は決して悲観的にならず、知恵と力を合わせて「生き抜く」人生の本質を考えつつ、多くの人が主体的に力強く歩みだしているような気がします。

人生100年時代。定年後の15年（60歳から75歳）は「黄金の時代」と唱える人もいます。わたしの連れ合いは扶養義務を終え、週4日勤めに出て2日間は田畑仕事、親の介護をしながらフードバンクの会計係や地域食堂の料理方を務めています。まさに「黄金時代」かも。家に閉じこもり、先を憂えるのではなく、人と関わりながら活動し、誰かの支援を受けるだろう80代に備えておくことも大切なのです。現に、安武町の地域食堂では80代前後の方々が生き生きと立ち働き、御井校区でも地域食堂がスタート。30代から90代が混じって料理をされ、近所の高齢者の方が昼食で利用されています。

当法人が開設に携わった「ぷらっと.荘島」では、毎週木曜に「ジーカフェ」が開店します。91歳の浦田さんがカウンターでコーヒーを淹れる日です。足が腫れて歩きづらいので、その大変さを思って、支援の専門家が「デイケアで機能訓練を受けたら」と度々勧めても、ご本人は「ぷらっと.荘島」に通い、スタッフが淹れるコーヒーを味わいながら常連さんと話すのが楽しみ。ある時、「コーヒーを淹れてみようか」とぽつり。スタッフが、コーヒーメーカー、蝶ネクタイ等を揃えたら大喜びで、「初心者」だった彼は今やバリスタ然として、「おいしい」の一言にご満悦です。浦田さんのつぶやきを拾い、彼の力を信じて寄り添ったスタッフの力量。さらに言えば、「ぷらっと.荘島」というステージを備えていたからでしょう。改めて、支援者中心の「パターナリズム※（介入）」について自問しました。当法人の障がいのある利用者に対しても、「こうしたがいい」と決めつけて支援をしていないか。「それはパターナリズムでは？」と常に意識しつつ、自分達の実践を問い直していきたいものです。

※パターナリズム　支援者が被支援者の意思や自由を制限してサービスを提供すること

CONTENTS

● 寄稿　久留米未来官民協働プロジェクト … 2
● 出会いの場Leo・ぷらっと.荘島 … 3
● 御井あんだんて　地域食堂 … 4
● ほんによかね会　地域食堂 … 5
● 「はたらく」を追及する … 6
● 基幹センター「公式LINE」 … 7
● 第22回　ポレポレ祭り … 8

拓く通信
2023年3月号（年2回発行）　発行・社会福祉法人 拓く　法人本部　〒830-0071 福岡県久留米市安武町武島468-2　TEL 0942-27-2039

第22回 ポレポレ祭り
2023年11月5日(日)、出会いの場ポレポレにて開催します！

2019年第18回 ポレポレ祭り（会場／出会いの場ポレポレ）
ステージ前で手拍子、一緒に踊る皆さん。

3年ぶりに対面で開催。「あなた」と未来を創っていきたい。500人のボランティアで、5000人規模の祭りへ。

新型コロナウイルス感染症拡大の3年間、ポレポレ祭りは中止とせず、カタチを変えて開催してきました。2020年は完全予約制で縮小し、2021年はオンライン開催。そして、昨年は「夢気球トリビュートコンサート」と銘打ち、石橋文化センターを会場に参加者1000人規模で実施しました。コンサートを創り上げる過程で、一人一人の思いや力に支えられて気持ちや考えがひとつになり、結果的に感動だけではないものが生まれました。さらには、舞台に登場した出演者やプロデュースなどの参画者、ボランティアの皆さんと、これから一緒に「未来を創っていきたい」という強い想いも沸き起こりました。

第22回目の実行委員は、地域の方々や当法人の関係者に加えて、一般社団法人「ほんによかね会」、一般社団法人「ぷらっとどっと」「本業＋α」「そなえるくるめ」の皆さん、さらには新しいチームや団体の皆さんにも加わっていただき、500人のボランティアで、参加者5000人規模の祭りへ。さらに大きな絆の輪を広げていきたいと考えています。

そして、今後、ポレポレ祭りで得た収益は社会的課題を解決しようとする団体やチームとシェアすることで、さらに新たなセーフティネットや社会的事業が生まれるような仕組みを作っていきたいと思います。ご期待ください。

2022年 夢気球トリビュートコンサート

第21回ポレポレ祭り　収支決算報告

収入の部	
項　目	金　額
広告・協賛	1,818,340
チケット売上	1,953,000
その他（お祝い・利息）	85,039
収入合計①	3,856,379

支出の部	
項　目	金　額
消耗品	69,024
設備費	613,030
通信・印刷・パンフレット代	381,446
コーディネート料	1,000,000
その他	881,191
支出合計②	2,944,691
収支差額（①−②）	911,688

※収益は社会的課題を解決しようとする団体やチームに役立てていただきます

社会福祉法人拓く　1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所　出会いの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・ポレポレ居宅介護支援センター
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター

活動を更新中！
拓くインスタ QRコード　夢工房インスタ QRコード　拓くウェブサイト QRコード

第2回
拡大コンソーシアム
（中央）
発表者　鴨崎さん

特別寄稿

暮らしを自分たちの手に取り戻していく。かけ合わせの物語から広がる未来の風景。

今年度から新たな取り組みとして開始した「久留米未来官民協働プロジェクト」。
合計23回の対話の場（会議）と約80名の登壇者、参加者が織り成すかけ合わせの物語は、
私たちにどんな「久留米の未来」を見せてくれたのだろうか。

久留米未来官民協働プロジェクト事務局　**鴨崎　貴泰**
合同会社シッカイヤ 代表・認定 NPO法人日本ファンドレイジング協会 常務理事
社会的インパクトセンター長・長野県立大学客員准教授

「暮らしを自分たちの手に取り戻す」

本プロジェクトは、地域共生をテーマに久留米市内の地域課題（就労や教育など）の現状を学び、市内で行われている様々なチャレンジ、プレーヤー※を知り、課題の解決方法（プロジェクト化）を官民協働で検討することが目的です。プロジェクトには、介護や福祉事業者だけでなく、子どもの教育や環境保全、まちづくりを行っているプレーヤーや行政、研究者などが久留米内外から参加し、合計23回の対話の場（会議）で約80名の登壇者がそれぞれの取り組みを紹介し意見交換を行いました。本プロジェクトのコンセプトは、「暮らしを自分たちの手に取り戻す」です。この背景には、「住民（私たち）は暮らしの主体者として動く力を失っているのではないか？」という私たちの課題意識があります。具体的には、「子育て、介護の問題は福祉サービスが解決してくれるだろう…」「教育も保育園、学校に任せておけば大丈夫だろう…」という私たち自身の意識が暮らしをつくる主体者として意識を薄くし、結果動く力を失ってしまったのではないでしょうか。

コンソーシアム
前日の視察
「みんなのサロンSORA」
にて
（右端　鴨崎さん）

かけ合わせの物語から広がる未来の風景

本プロジェクトを通じて、私たちが「暮らしを自分たちの手に取り戻す力」として注目したのが「内発性＝損得勘定を超えて内から湧き上がる力（徳＝virtue）」です。この「内発性」が湧き上がるために重要なことの1つが「相手の暮らしや気持ちに踏み込む」ことです。人は踏み込み合うことでお互いの「弱さ」を開示することができます。その弱さに触れた時、人の心身には自動的に「（損得を超えて）この人のために何かしたい！」という内なる力が湧きます。これが「内発性」です。

そしてもう1つ重要なことが「すごい！と思える人に触れる」ことです。「すごい人」と言っても偉い肩書きや特別な能力のある人ではありません。例えば登校のサポートを必要としている障がい児が地域にいることを知った人たちが自発的に集まり、毎日登下校のサポートを続けています。この話を聞いて私たちは「（この人たちって）すごい！」と感動します。人はこのようなすごい人、物語に触れると自分の中にも力が湧いてくることを感じます。力は伝染するのです。これも「内発性」です。

「踏み込み合う関係性」や「すごい！と思える人、物語」がかけ合わせられながら、さらに多くの豊かな関係性と物語が生まれていく。そしてその中で人々は「内発性」を涵養（かんよう）し「暮らしを自分たちの手に取り戻していく」。そんな久留米の未来が垣間見えます。

※地域課題解決に取り組む事業者や個人、担い手。
●当法人は本プロジェクトの事務局を務めています

Leoとぷらっとが織りなす物語 その5

出会いの場Leo × ぷらっと.荘島 × ご近所さん

地域の皆さんと「お互い様」で生きていく

「出会いの場Leo（以下·Leo）」と併設の「ぷらっと.荘島（以下·ぷらっと）」は、
市街地でありながら古くからの町並みを残した荘島町にあります。
高齢の方々が多いご近所さん。親しくなりたい。地域のお役に立ちたい！
開所して約2年半。一歩また一歩皆さんとの距離を縮めています。

出会いの場 Leo　管理者　**溝尻　博子**

Leoのお隣さん。
4世代、合計6名で参加

顔を覚えてもらおう、新たな関係づくり。

Leoは荘島町の一画に飛び込み、児童発達支援の事業所を始めたものの、ご近所さんは急に現れた「新参者」を遠くから窺っている様子でした。コロナ禍で町内の催しは特になく、もどかしい中、顔を覚えてもらおうと子ども達のお散歩の時に立ち話をしたり地域の清掃活動にスタッフと子ども全員で参加したり。いつしかお隣さんが「作ったよ～」と芋の天ぷらを手に立ち寄ることも。わたし達も、奥さんが病床に臥したと聞けば、食事等を自宅に差し入れをする、そんな親しい間柄になりました。

12月は法人関係者がサンタ役になっての「Leoクリスマス会」。昨年は思いきってご近所の「佐藤のおじちゃん」にお願いしました。最初は「しきらん～」との返事でしたが、「子ども達が、サンタさん楽しみにしています」と伝えつつ、安心して演じてもらえるよう念入りに打ち合わせも。当日はサンタの衣装でぷらっとに登場。満面の笑みで子ども達にプレゼントを渡してくれました。もちろん「佐藤のおばちゃん」も参戦、お二人で大活躍です。

「佐藤のおばちゃん」は、
最年少0歳の参加者を
抱っこしてにっこり。

0歳から97歳まで、
22名が集合。

「佐藤のおじちゃん」が
笑顔でプレゼント渡し。

わたし達から始める、絆づくり。

「料理を持ち寄り、ぷらっとで忘年会をしませんか？」

ある時、意を決し近所の方々に切り出しました。皆さんは「いいね～」と乗り気。参加人数も分からないまま当日を迎えると、0歳～97歳までの22名が参加。自己紹介をして自慢料理に舌鼓を打ちながら、Leoとぷらっとスタッフが混ざり合って話します。ある方は体の不調、ある方はひとり暮らしの不安をぽつり。わたし達も、「Leoの子どものことを知ってほしい。見守ってほしい。皆さん、何かあればいつでも声を掛けてください!!」ときっぱり。地域の方々と「お互い様」の関係で支え合っていく。そう決意した一日でした。

Leoのスタッフは「昔ながらの近所づきあい」を煩わしく思うミレニアル※世代。では、なぜ地域の方との関係性を紡ぐことに力を注ぐのか。誰かが困った時、自然災害が起きた時、一番近くにいて支え合える、きっとそれぞれが力になると信じているから。お互いを気遣い、対話できる関係を努力して築いていきたいと思います。

※1981年～1996年に生まれた世代

●出会いの場Leo　児童発達支援事業所
●ぷらっと.荘島　Leoに併設したコミュニテイスペースで、気軽に立ち寄れる子どもや大人の居場所。（一社）「ぷらっとどっと」が運営を行う。

つむぎ食堂

御井あんだんて「地域食堂」

「親なき後」の問題を考え、地域の人と再びつむぎ合う。

「夢工房」とグループホーム「御井あんだんて（以下・あんだんて）」は、
久留米市の東部に位置する御井町にあります。
夢工房の開所から35年、保護者の高齢化と「親なき後」の問題が目前に。
住み慣れた地域で親しい人達と暮らしたいー。誰もが願うこと。
今年、安武町に続いて、御井町でも「地域食堂」を始めました。

夢工房　管理者　**野上　真紀子**

近所の方と巻き寿司弁当を作っています。

新キッチン完成

業務用のガスコンロ、洗い場のシンク、手洗い場を設置。

来店されたりご自宅に配達したりで、50食完売！

「新しい カタチ」の暮らしの場を拓いた

1980年代の当時、重度の障がい児の卒業後は、自宅か遠方の施設に入所の２つの選択でした。子どもらを目の前にして、「地域で暮らしてほしい」「働けるような作業所があれば」。旧久留米養護学校の教員と保護者らは共生教育運動を展開し、1987年に共同作業所「夢工房」を立ち上げました。後に当法人と合併し、夢工房の近所に「あんだんて」も開所。そこは終の棲家ではなく、一般就労に向けての生活支援の場、つまり自立生活の通過施設としての出発。入居メンバーは高等部を卒業した５人です。支援の専門家だけではなく保護者のPTA仲間、運営委員は御井校区住民、その皆さんが見守ったり応援したりして「新しいカタチ」の暮らしの場を拓きました。後に３名が一般就労、１名が就労継続支援Ａ型事業所勤務となり、働いたお金と年金をもとにグループホームから※サテライト型住居、アパート生活へ。５名は施設でも親との同居でもなく、「ひとり暮らし」を選択し、新生活へ羽ばたいています。

「つむぎ食堂」で新たな支え合いを拓く

「夢工房」の保護者は、35年間クッキーの販売活動や御井校区の行事等を親子や仲間で意欲的に活動されています。直面する課題は彼らの高齢化、そして「親なき後」のこと。話し合いの場をもったところ、「今は大丈夫。先の話」「まだ元気」と。住み慣れた場所で親しい人とつながり暮らしたい。それが希望だと改めて思い知り、地域での受け皿や支え合いの場を備えておこうと走り出しました。

「あんだんて」には、2014年結成の「つむぎの会」があります。その会は「お年寄りも子どもも、女性も男性も誰もがいきいきと生きられる地域を創ろう」の願いのもと、カレー昼食会や障がい児の家族を誘ってキャンプ等を実施していましたが、コロナ禍で活動は大幅に縮小。今年からの活動再開を機に、御井町で新たに「地域食堂」を開店し、その名は「つむぎ食堂」。わたし達には、安武町で「地域食堂」の実践を重ねている(一社)ほんによかね会の先輩方がいます。ノウハウを学びながら、御井町の皆さんと新しい物語をつむいでいきたいと思います。

※グループホーム近隣の住居で支援を受けながら一人暮らしをすること

- **夢工房**　生活介護・就労継続支援B型
- **グループホーム 御井あんだんて**　2010年4月、民家を改修してスタート。利用者の「暮らし」と「働く」を応援。現在、入居者は2名。

「御井あんだんて」3月から体験宿泊を始めました

居室のベッドメイキングは協力する等、入居メンバーは自分達でできることを増やしています。ご飯はお好み焼きや焼きそばをキャーキャー言いながら頑張って作りました。

暮れの市

（一社）ほんによかね会「地域食堂」

寄り添う人を増やそう。地域で誰もが暮らし続けるために―。

2022年9月より、ほんによかね会を主体として始めた※配食事業。
安武町のひとり暮らしや外出が難しい高齢者にお弁当を作って届けています。
また一歩、地域に飛び込んで見えてきた課題も。
寄り添い、支え合う仕組みづくりに向かいます。

ポレポレ居宅介護支援センター　管理者　**小川　真太朗**

配食事業での出会い　ひとり暮らしのおじいちゃん

「誰ね？」「いったい何の団体ね？」

配食開始の日、１人目の配達先に張りきって向かった家の玄関先で、高齢の男性が仁王立ちです。説明してもうまく伝わりません。お弁当を渡して「来週また来ます」と言ったのが、94歳ひとり暮らしのおじいちゃんとの出会いでした。翌週ドキドキしながら足を運ぶと「誰ね?」「先週来ましたよ!」「弁当の兄ちゃんね?」「そうですよ!」。ある時、おじいちゃんが「電気がつかん。兄ちゃん分かる?」と困った顔。照明器具を直したのをきっかけに会話も弾んで、「頑張って。応援しとるよ」「兄ちゃん達が来ると元気になる」と。この言葉は励みになりました。今年2月、おじいちゃんは施設に入所。自分達ができることは少ないと思っていた半面、地域食堂に誘って作り手と食べ手でお喋りする機会を設ければ、おじいちゃんに寄り添う人を増やせたかも、と。安武町には在宅生活の高齢の方が大勢おられます。地域食堂運営や配食事業を通して目を配っていきたいと思います。

今度は僕らが背中を見せる　仲間づくりへ

昨年11月の「夢気球トリビュートコンサート」では、久留米商業高等学校（以下・久商）の生徒70名がボランティアとして1,000人規模のコンサートに参加。世代の想いと感動が重なったせいか、自分達が未来を創るのだと使命感みたいなものが沸き上がり、終演後すぐ「久商の生徒さんに障がいのある人や高齢者と一緒に活動して欲しい」と伝えました。学校側の賛同を得て、第一弾として12月29日、「直売所そらまめ 暮れの市」に久商生30名が参加。10代の彼らは意欲的に働き、僕らも「心配しないで。一緒に作るよ」「何か困ったらすぐに言ってね」と励ましの言葉をかけていました。「ひとりでやれることは何一つない」。これを実感した今、地域食堂の80代後半の先輩方や祖母が手本を示してくれたように、30代である自分らが背中を見せて立たなければ。自ら率先してやってみたり、共に力を合わせたりしながら寄り添える仲間を増やしていこうと思います。

※（一社）ほんによかね会が主体。地域食堂で作った弁当を買い物や食事作りが困難な高齢者へ届ける。週５回（月・火・水・金・土）。

- **（一社）ほんによかね会**
  地域のみんなで安武町を元気にしようと直売所の運営、地域食堂の活動をしている団体。当法人は、公益事業の一環としてその活動に参画しています。

2022年12月29日
主催／（一社）ほんによかね会
会場／JAくるめ安武農産物直売所「そらまめ」（安武町）

たこ焼き・わたがし等のブース
久商の皆さんは黄色いハッピで大活躍。地域の高齢者やスタッフに手順等を教えてもらいながら、販売。

子どもブース
子どもたちが楽しめるゲームを用意

地域の方が育てた野菜の販売

上手に筆が扱えない人のためにローラーやマスキングテープを使用。大胆に塗れるように工夫した。

日中活動・施設外就労の現場から

「はたらく」を追求することは、ムズ面白い。

今年度からおよそ8年ぶり、日中活動の担当に。
その当時は、イベントを催して売上・工賃を得ようと、総出で夜遅くまでの作業。
職員だけで必死にこなしていた。
そして今、改めて日中活動、施設外就労の現場で、誰もが「はたらける」可能性を追求している。

出会いの場ポレポレ　管理者　**浦川　直人**

出会いと工夫で「はたらける」

出会いの場ポレポレが開設して22年、内壁も色がくすみ傷も目立って補修が必要な状態。これまでは専門業者にお任せだったが、DIY[※1]によるリノベーションを得意とする半田[※2]さんにアドバイスをいただき、昨年10月、日中活動の一環としてDIYに挑戦した。課題は、どうしたら利用者と職員みんなが「共に」補修作業に関わり、はたらけるか。単に塗るだけではなく、自然や動物などをテーマにして各自好きな下絵を描こうと決めた。ところが、集まったのは絵が描ける一部の人だけ。そこで、テーマを替えて、線や丸、三角、四角といった自由な形に。多くの職員がサポートに回り、利用者が描きやすいよう紙の置き方、マジックの持ち方を工夫しながら再チャレンジした。ようやく絵が集まる。車いすの人もサポートする職員も新しいことに面白がり、うれしそうにはたらいていた。素人には無理だと思っていた内装工事も、出会いと工夫で、「はたらける」に可能性が広がった。

4ユニットある2階建ての大きな施設のトイレや床、洗面台の清掃。

「はたらく」で、生きるよろこびを広げる

当法人でも施設外就労という新しい就労のカタチが増えている。コロッケ工場、地域食堂での仕事。12月から新たに介護施設の掃除業務を請け負った。利用者にとって初めての現場、介護施設の職員さんとの協働作業。施設の担当者は、障がいのある人と接するのは初めてで戸惑いながらも、利用者・職員を一人前にしたいから何でもトライ！という姿勢。支援者側ができないと判断し避けていた作業もあるが、利用者は「難しいけれど、がんばる」と。職員・利用者関係なく、苦も楽も共にする施設外就労。「今日もがんばった」「〇〇ができるようになってきた」「またあの仕事したいな」と意欲が湧きあがる。工賃を稼ぐ以外の充実感や成長を感じられ、一緒にはたらく人の意識や場所などの環境を整えれば、もっとはたらける分野があるのではと発見がある。私たちの仕事は「生きるよろこび」を広げていく実践の積み重ね。難しさはあるが、広がることの面白さもある。これからも多様な人の「はたらく」を追求したい。

※1 英語「Do It Yourself」の略で、プロではない人が自分（たち）の力で物を作ったり、修繕したりする活動。
※2 久留米市でマチとつながる賃貸アパート『H&A Apartment』の運営を中心に、賃貸物件・店舗のリノベーション、DIYワークショップの企画・運営、まちづくりなどに取り組む。

基幹SNS

久留米市障害者基幹相談支援センター「公式LINE」のスタートへ。新たな出会い、仲間づくりのきっかけにしたい。

久留米市には、障害者基幹相談支援センター（以下・基幹センター）が東西南北に分かれて4ヶ所設置されている。
障がいのある人や家族等への相談支援、地域づくりへの取り組みをする機関。
2023年3月、「公式LINE」を立ち上げた。SNSの活用により、「仲間づくり」に新たな一歩へ。

久留米市西部障害者基幹相談支援センター　センター長　**北岡　さとみ**

多様な人と出会える「場」をつくる

今年度から基幹センターの業務に初めて携わることになり、障がい者やご家族のリアルな声を聴いている。「子どもに障がいがあると知った時、誰に？どこに？相談していいか分からなかった」「心配事はSNSで検索して自分で調べるしかない」「病院にも相談しにくい」「特別支援学校高等部の卒業後はどうしたら」等、切実な悩みにぶつかった。私も子育ての真っ只中。子どもが成長するにつれ家族の悩みも変化するが、先輩や同世代のママパパの話を聞くことで気持ちが楽になり、子どもの将来が見通せるようになる。そこで、障がい児・者の「親の会」やご家族との意見交換を重ねた。「体験談を聴きたい」「へぇ、そんな風に考えればいいんだ」「あるあるそんなこと、私も悩んでいた」「直接会って話したい」「名乗るには抵抗がある」と次々意見が集まる。それぞれに悩みもタイプも違うからこそ、多様な人と出会える「場」が必要だと痛感した。まずは情報をまとめようと、SNSの活用へ。今年3月に基幹センターの「公式LINE」を立ち上げた。

NPO法人久留米市手をつなぐ育成会や「ぷらっとどっと」の皆さんと「公式LINE」の打ち合わせ

新たなつながりやコミュニティづくりへ

市内には親の会や地域の居場所となる拠点が数多くある。そこで活動する皆さんは、同じ想いをもつ人を支えたい、過去に助けられて恩送りをしたい、仲間として手をつなぎたいと望んでいる。一方で、悩みを打ち明けたい、相談したいという人もいる。SNS活用によるマッチングによって、新たなつながりやコミュニティが生まれればと思う。もちろん、待っていてもほしい情報は集まらない。基幹センターや既存の支援団体、拠点との話し合いを積み重ねながら、新規のグループの情報等もキャッチしてネットワークの輪を広げていきたい。

私たちの新たな一歩から出会いが生まれ、仲間づくりのきっかけとなる。そして、相談する側であったその人が、いつしか相談される側になったり支える側に立ったりする。そのような支え合いが当たり前になっていく、10年後のまちの姿を思い描いている。

みんなのいばしょを運営している『きらり☆ひろば』を訪問し、意見交換。

●久留米市障害者基幹相談支援センター　2016年（平成28）年7月開設。市内の学校区でエリアをわけて、東部、西部、南部、北部を4法人で運営。相談の他、研修会の開催や地域づくりへの取り組み、社会資源の情報収集やつながりづくりを行う。

LINE

QRコードから友だち追加

※ID検索から「友だち」追加！　https://lin.ee/4FSklx7